新選女禮式

全

375.9
K019
資料室

30565
教科書文庫
3
160
31-1893
2000
19060

資料室
中央図書館

395.9
M17

嵩山堂編輯

新撰女禮式

浪華　嵩山堂藏梓

広島大学
1906
図

新撰女禮式

目次

起居進退
○起ち様○歩み様○座ち様○拝ち様○起ち還り様○人ゝ前後を過ぐる様○障子襖ゝ開閉○行逢ひの禮○主客應接
物品薦撤
○煙草盆進め様并に収め様○火鉢進め様并ゝ収め様○茶進め様并に収め様○菓子進め様并ゝ収め様○書冊巻物等の類進め様并ゝ収め様○料紙硯箱進め様并ゝ収め様

陪侍周旋

○燭臺扱ひ様○小袖羽織の類着せ様○袴着せ類

○掛物扱ひ様

授受捧呈

○辭令書授け様○同じく領受する様

進饌程儀

○本膳進め様○二の膳三の膳進め様○引肴進め様○飯の再進○汁の再進○盃進め様○酒進め様○吸物進め様○取肴進め様○本膳二の膳三の膳撤し様○湯進め様　抹茶進め様○給仕ゑ出る者の心得○客を請するの心得

飲食程儀

○茶喫し様○菓子喫し様○膳受け様○酒受け様○箸の取り様○吸物吸ひ様○飯の食ひ様○汁の吸ひ様○廻りの物食ひ様○物喰ふ時の心得○楊枝遣ひ様○抹茶受様

附録

○座ゑ在る物を蹈越べからざる事○言葉つき心得○途中人と連れだり時の心得○鼻をかむ心得○圓紀物喰ひ様○扇子遣ひ様○烟草吸ふ時の心得○恭敬の程度

女生徒の心得

新撰女禮式

廣島大學圖書之印

起居進退

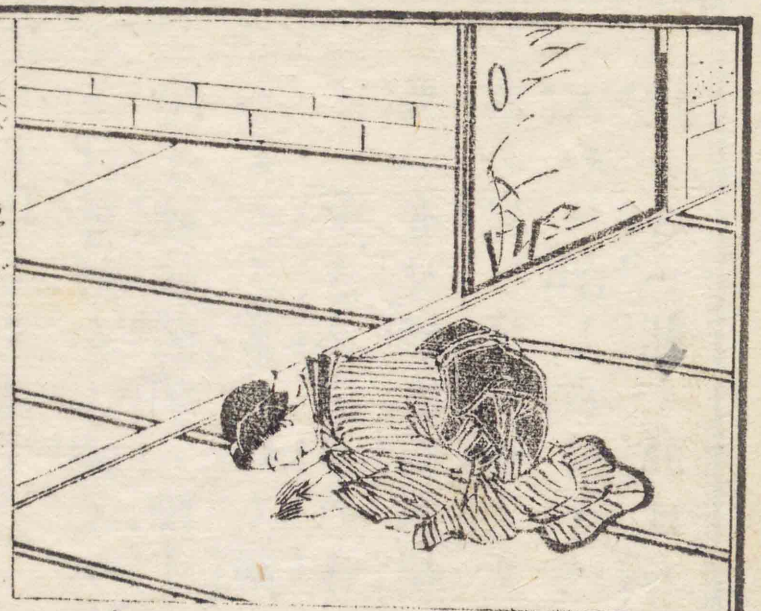
○起ち様　右の手を膝の上に置き、左の手の指先を膝の脇に着け、腰を立てゝ、右の膝を少しくあげ、體の起つに隨ひて、左の足を揃へく起つべし

○歩み様　両手の膝より上に伸し、臂を張らす縮ませず、肩を平らゝし、腰を屈めず、胸を出さず、踵を地に附け、静かに、すらと、歩むべし

○座する様　右の足を少き進めて跪つき、左の膝を揃へ、右の足は拇指にかさねて座し、両手を膝の上よ置くべし

但し貴人の側近き所にては、両手の掌を稍外へ向け、膝の両脇よ指先を着くへし

○拜する様　両手の指先を向へなし、臂をも着け、左右の拇指と次指とを突合せて、其上ふ額を着け、腰の高くならぬ様よ、脊を平ちかよして拜するなり、椅子よりたる人を拜する時ハ、両手を膝頭まて下げて禮すべし、又椅子よ在りく人よ禮する時ハ、椅子を離れ起ち、稍其脇よりて前の如く拜禮すべし、總て立



但し者座の模様よりて、左へ披くべき時ハ、右の反對と心得べし

禮は、拜するとき腰を屈するも、膝并びに臂の曲らさる様よ注意すべし

○起ち還り様　右の手を膝の上よ置き、左手ハ指先を膝の脇に着け、腰をたて足を先立て、右の膝を少き、あげ、稍右座ハ方に向ひて起ち、下座へ廻りて還るなり

○人の前後を過ろ様　上輩へむ、下座のかたれ足よ
り進めて跪つき、両手の指先を着きて會釋し、下座の
足より起ちて過くべし、同輩へハ両手を膝頭の上ま
で下げ、會釋をして過くべし

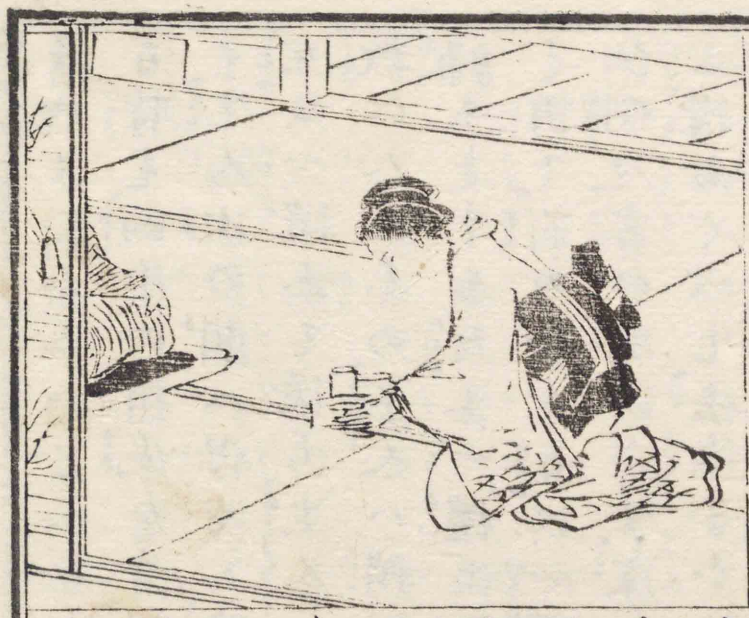
○障子襖ハ開閉　障子襖を右へ開かんとせむ右の
方へよりて、常の如く跪つき左の手よて引手を取り
少し開き、次ま右の手を梱ぎハより三四寸ほと上
の處に着け、能き程に開くべし、夫より起ちて梱を越
ひ右へ廻り、障子襖のかたへ向ひて跪つき、左の手に
て大かた閉し、右ハ手ふて閉し盡すべし
但し左へ開く時は右の反對と心得べし

○行逢ひの禮　上輩へは、六
七尺ほと前よて右へ斜に一
足披き、両手を膝頭まて下げ
敬禮を行ひ、而して貴人吾
前を過き去り給ふて後、右の
足より進み去るべし」同輩へ
ハ三尺ほど隔て、互に、右ハ
方へ斜ま倚り一禮ま、同時に
進ミ去るべし

○主客應接　上輩の邸第へ行く時ハ梱の外にて常
の如く跪つきて拜禮し主人、おたへとハたまふ時、

起ちて梱の内へ入り、前の如く敬礼すべし、遅るるときも亦前の如く拜礼し、上座へ披きて起ち、梱を出で、又正面へ向ひ、拜礼して起ち還るべし」上輩来り給ふ時も、式臺まで出迎ひ、夫より案内ち、座敷の梱の外にて跪づき、あなたへと云ひて客を座敷に入らしめ、次に亭主下座に着きて拜礼をべし、還るたまふ時も主人先に進み式臺まで出で、拜礼して別るべし、尤も格別の人ハ非さまば式臺の内にて送迎するも苦しからず、但し送迎の節障子襖等ハ總て主人之を開閉する者と心得べし」下輩の來り礼するときハ、上座ハ座したる儘にて、彼れの梱の外にて拜する時ハ、片手を

着きてこなたへと云ふべし、彼れの梱ハ入りて拜する時も、両手の指先を着けて一礼すべし」同輩への礼も、主人次の間へ出で、跪づき客も、主人と向ひ跪づき、互ひに一礼ち、て後ち主人ハあなたへと云ひて客を座敷に入らしめ、主人ハ稍下座に就き、互ひに拜礼すへし、帰るときも互ひに一礼して、主人先へ進み玄關の側まで出て、前の如く互に一礼して別るへし」都て床の向ひ側ハ、客の座にして、床の有る方ハ亭主の座なりと心得おくべし、去りなから、家によりて、床ハ附けりさ種々あれば必らず前の如くに着座ち能いざる事あるべし其時も宜しき様に見計らふへし

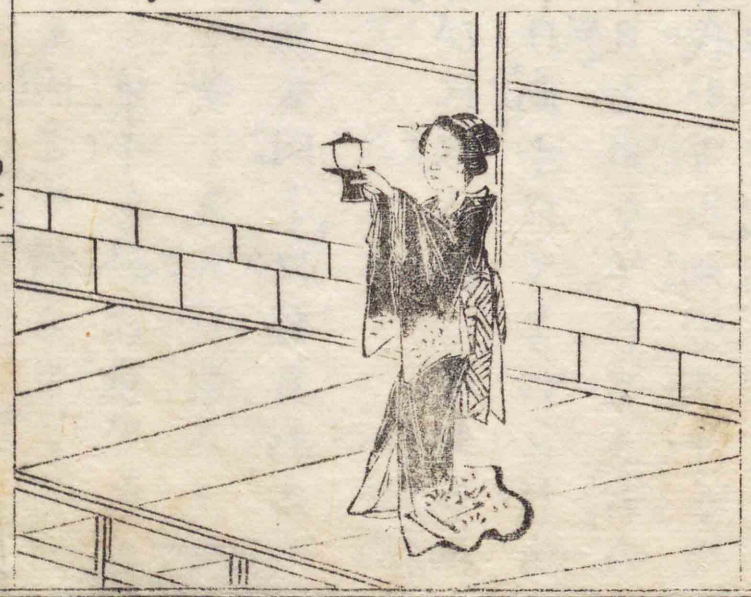


物品薦撤

○煙草盆進め様并びに収め様　煙草盆の内ハ火壺をば、客の左のうたに、唾壺を右のかたにおて、之を両手に持ちて出で、受くる人の前に跪づき之を置き両手ホく少しく進め、上座へ廻りて起ち退るべし、収むる時ハ、前の如く出て跪づき、両手にて煙草盆を少しく手前に引寄せ、両手に持ちて退るべし

○火鉢進め様并ホ収め様　大うた煙草盆に準ず、火鉢の足三つある者ハ、二つを上座ハ方へ向け、一つを下座へ方おて置くべし

○茶進め様并に収め様　茶碗を臺に載せて、両手ヨ持ちて出で、受る人の前ヨ跪づき之を進む、客直ちに茶碗を取るときは臺を以て退るべし、客直ちに取らざるときハ、臺のまゝ下に置きて退るべし、又客のかたにて臺とゝもに



取る事もあるなり」収むる時も同じ心得なり

○菓子進め様、菓子を鉢に盛りたるを膳よ居へ、両手に持ちて出で受くる人は前ふて跪づき進むべし、進め方は煙草盆よ同じ心得なり」収むる時も同

○書冊巻物等の類進め様并びに収め様　書冊巻物等ハ、標題を手前のかたよ向け、両手にてうけと持ちて出で、進めんとするとき一旦これを下に置き、右の手にて右の隅を取り、字頭を我が方へ廻し、両手ま て進むべし」収むる時ハ、両手を向ふへ取回し前の如く持て還るべし

但し書冊巻物とも相應ぶ臺に載せて出すときも、之に準じて知るべし

○料紙硯箱進め様并びに収め様　硯箱のうへに料紙を載せ之を両手にて持ちて出て前に置き、料紙を載せさるまゝ、其の蓋を取て右の脇に置き（蓋の内よ摸様あるものハ、仰むけて置き、其内に料紙を載すへし）水滴をこりて水を注ぎ、墨を磨り筆を墨汁

に浸ム、而しく硯箱を客のかたに向け、両手ヨて進め、次に料紙(蓋に載せたるまゝ)をば、前ハ如く進むべし」収むるときム、硯箱を手前へ引き寄せ、次ぎホ料紙も引き寄せ、硯箱の蓋をホ志て、元の如く持ちて還るべ一

陪侍周旋

○燭臺扱ひ様　燭臺のさはを右の手に持ち、臺を左の手に持ちて出で、常の如く跪つき之を置くへし、二枝出たす時ム、上座の方より出し下座よ里引くべし、但し足三つあるものム、二つを上座の方へ向け、一つを下こす、且燭剪挑あるものム、其かさを下とそべし」

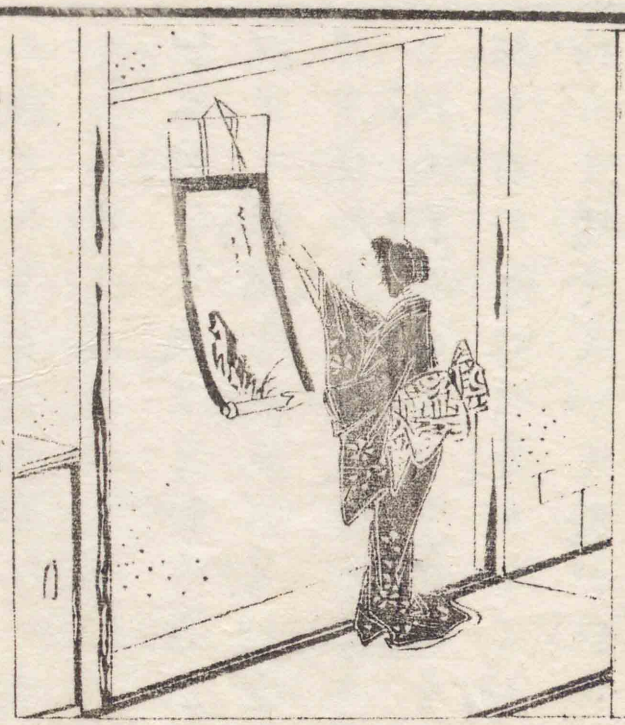
燭ハ剪里様ハ燭壺を左の手ヨ持ち、右の手に燭剪を持なから、燭壺に添へて進ミ出で、燭臺の前に跪つき、燭壺を下ヨ置き、燭剪を其上にハせ、夫より燭臺を両手ヨて引寄せ、前ハ如く燭壺ニ燭剪ニを持ちて燭をきヨ再び元の如く進むべし

○小袖羽織ハ類著せ様　常ハ如くたゝみたるをム、両手にて左右の袖口を把り、小指をろの内

ふ入れ、拇指と次指とまて、襟を持ちて引立て、右此足より立ち、袖口の手を離さ、左の手より着せ參らせなり

○袴著せ様　常此如く疊そたるをバ、後ろ腰を向ふへ垂れ前組を左右へ分け、前腰を両手ふ持ちて進むべし

○掛物扱ひ様　掛物と火竿とを臺ふのせ持ちて出ぐ、又も臺に載せ来て左の手に軸の中程を持ち右にて火竿を持ちあから、軸の端ふうへ持ち出るもあ足床の前ま跪づき、臺を右ふ置き、軸を右の手ふ取ま揚げ、左の手に移し、紐を右ふて解き、小指の間ふ挟み



軸の上をとま、一文字の邊まで披き、床の上ふ置き、風帯あるものハ、右のかたより整ひへ、左に及ふべし）右の手に火竿をとり、掛緒を夾み（此時左の手にて、掛緒を持つ為り）程よき處まで披き、竿の足より立ちく折釘へうけ、竿を左の脇にたくかけ左右の手にく軸を持ち、坐ま退きて跪づきて、再び竿を取りて、立ち進みてひづみ

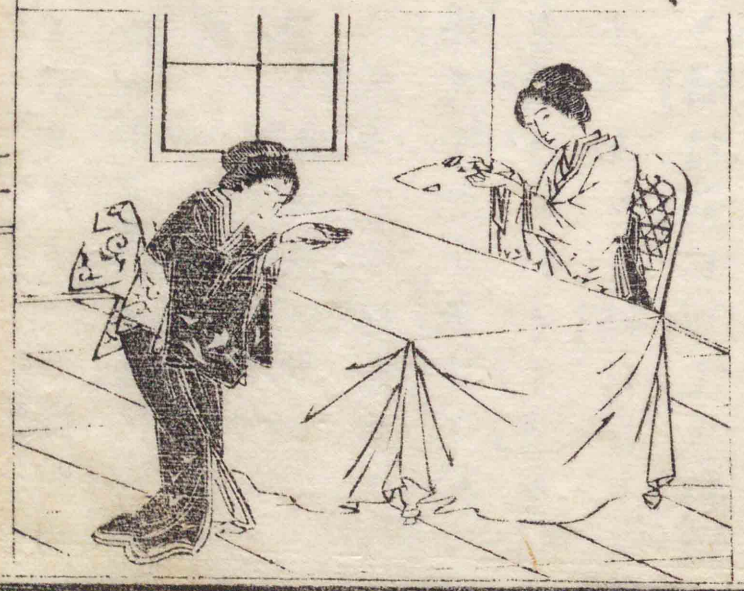
を直し、また退き跪つきて一覧し、次に竿を臺に載せて持ち還るへし」収むる時は、又竿を臺に載せて持ち出で、臺おきときは、竿を右の手ゐ携ふべし」床の前ゐ跪づき、臺を右のかたに置き、竿を取りて床の右のかたゐ建て、両手にて掛物の軸をとりて巻きおから起ち、程よき處よて軸を左よ手に持ち、竿を右の手よ取りて、掛緒を弛め二足四ど退きて跪づき、掛物を其ま、床の上よ置き、竿を臺よ載せ風帯ある者ハ左より収め、右よ及ふべし」掛物を巻ち盡し、左の手よ持ち、紐を右の手にて元の如く結びて臺に載せ、前の如く持ちて退ぞくべし、懸け収めする時ハ、床の上ゐ上ら

きるを宜しとすれども、深き床よて詮方おくも、上へあがりく懸け収免すべし

授受捧呈

○辭令書授け様　侍立の人、授くへき人の名を喚ぶゐ隨ひ、其辭令書を右の手ゐ持ち、左の手を添へて宇頭を我方へおして之を授け、其人拜する時ハ領して禮を受くべし

○同領受する様　召換に應じて進み出て、擡より三尺ハ



ど前にて両足を揃へ、一礼して右の足より、二足にく
も三足にても、程よき處まで進み、辭令書を左の掌に
うけ右の手を添へ敬して拜戴し、左より二三足退そ
き足を揃へ、右の手まて右の端を持ち、左の拇指にく
順次ま披き、一見して元の如く疊みく、中程を右の手
ふ持ち敬禮して上座へ披き退ぞくへし、夫より椅子
ふ倚り、扣へ居る時は、左の手を着き、右ゆ手ふ書を持
ち、膝の上ふ置くへし、又懐中ふ入るゝも妨けなし、二
通も三通も一度ま授けらるゝ時は、前に準して數通
を一時ま受け、一通づゝを披き、見了りたるを順次
に下へ重ね、而して右の手に持ちゝへ、敬禮して退ぞ

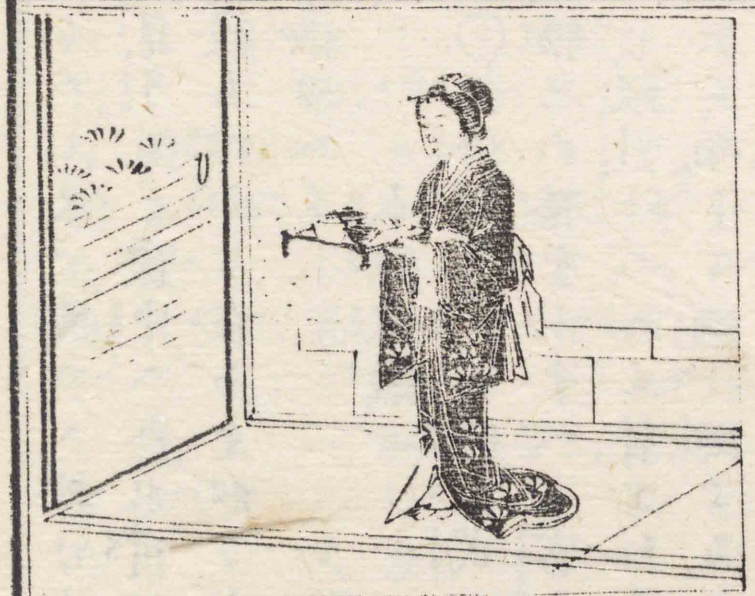
くへし」又一通づゝ授けらるゝ時も、先ま受けたるを
見了りてく懐中へ入れ、再び進みて受けたるを、一見の
後ち懐中ま在るを取り出たし、併せて右の手に持ち
換ゆへし

本饌程儀

○二汁五菜、七菜膳部式ハ、先づ本膳を出し、次ふ二の
膳三の膳を出すへし、客人食事ふ就て後ち引肴を出
し、飯汁一二へん替りたる時に酒を出し、之を中酒と
云ふ、而して酒一廻するとき紀も、又々飯を進むべし、食
事終らば膳を撤し、茶菓子を進むるを禮とす、但し略
式にて先つ吸物酒を出し次に膳部を進むるあり、何

きにても時宜に従ふへし

○本膳進め様　本膳を両手に持ち拇指を少しく膳のふちに掛け、其餘の指を揃へ少し屈して持ち捧げ様は乳に通りと平衡なるべし、客によりて膳の持ち様并に捧け様に上下の差あり、而して客の前に至りて跪づき、前に置き、両手にて膳の手前の隅を持ちて少しく進むへし、退そくぎきも上座の方へ廻り



て立つへし、略にも下座へ廻りて立ても苦しからず

客二行ならむ配膳の者も二行に、客一行ならは配膳も一行なるべし退くときも上座のもの還りて、次座の者の脇を通るとき、次座もの立つへし、略にハ下座の者より順次に立つべし」膳部を持ち進むるとき、并びに退ぞき還る時ハ何れも右に如くなれも以下一々之を記さず

○二の膳、三の膳進め様

む、客の右に、三の膳は、客の左のかたに居ゆべし

○引者進め様　者を重箱か鉢に盛りて膳に載せ、其内に箸を入れ（手前の右縁に掛け）て出ぐ、客の前にて

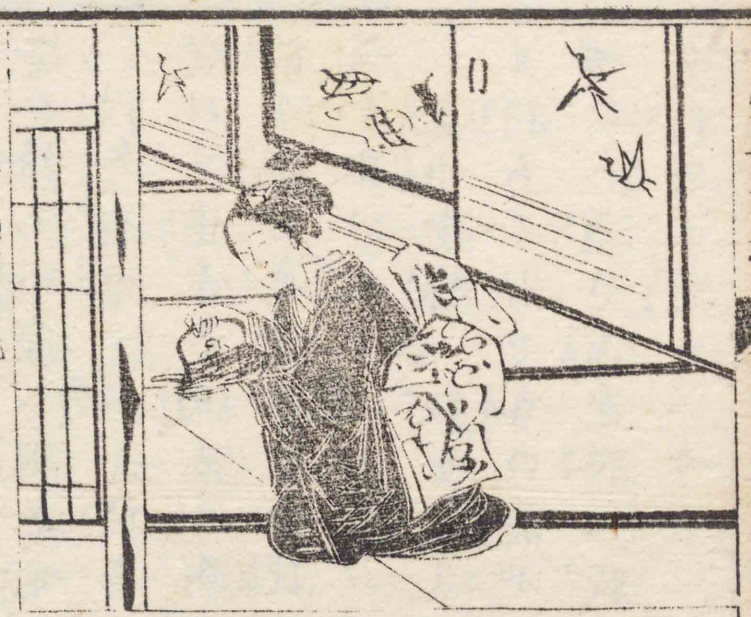
膳を上坐のかたへ斜めに置き、両手にて吸物椀の蓋を取り、肴を盛りて進ず、下へ披れく次客へも右の如く進むべし

○飯の再進　臺に飯鉢を居へ、其手前ゑ杓子を置き、両手ゑ持ちて出で、客の前にて上座の方へ斜めに置き、蓋を取りて飯鉢は脇ゑ立てかけ、飯椀を左の手に持つにいと底を拇指と次指とにて摘ま、他の指を伸ばして之を居へ右

の手を添へて受取り、二三杓子程好く盛り、左の手に持ちしいと底を離し、両手にて進ず、飯鉢は蓋をかし、臺を持ち下座へ廻り、元の場處ゑ還るべし

○汁の再進　盆を持ちて出で、客の正面へ進み椀を受けて退ぞき、而して再進を盛りて替蓋をかし、客の前ゑ跪づき、盆を左の片手にて確と持ち右の手にて蓋を取り、盆の縁にかけ置き、次に両手にて出すべし、

○盃進ず様　飯を先ゑ出ゑ時の式なり、盃を膳に載せ持ちて出で、客の前ゑ置き、三の膳を取り下坐のうたへ置き、盃を膳に載せたる儘進ず、而して三の膳を持ちて退くへり



○酒進免様　燗燗のいるを右の手に持ち、左の手を口の下に添へ、梱の外ホて中坐し、燗燗を持ちこるまゝ、客の方を伺ひ、夫より客の前へ進ミ跪つきて酒をつぐべし、事畢りて下座へ廻り、次客へも前の如く酌すべし」徳利にて酒を進むる時ハ、左の手にて徳利の中程を持ち、右の手をそゝ添へて酒をつくべし

○吸物進免様　吸物を膳に居へ、両手ま持ちて出で客の前にて置き、二の膳を取り下坐のゝゝへ斜めに置き吸物を進免而志て二の膳を持ちて退ぞくべし酒を先に出す時ハ、吸物ゝ盃とを膳ま居へ出そべし

○取肴進免様　小皿に盛り膳に居へて出で、客の前にて膳を上坐のかたへ斜免に置き、両手ホて小皿を取り吸物膳へ居へて後ち膳を持ち還るべし

○本膳二の膳三の膳撤し様　酒吸物を先に出ゝ跡より出ゝたる膳を先へ撤ゝべし

○湯進免様　湯つぎの手を右ゝ手ま取り左ゝ手を下ま添へて出で、之を進むべし

○抹茶進め様　茶碗を右の手ゝ居へ、左の手を添へて出で、其儘進むへし

○客を請せんと思はゞ、第一掃除を念入へし、飾附ハ四季よ應して面々相應ふすべし、客揃ふて料理おそきは惡き、去りとて坐につくや否や出すも宜しきにゝあはす、坐ふ内き先茶菓子を出し、暫らく見合はして膳を出す心得肝要なり

○給仕に出つるものは、客体を慎しむこゝ肝要なり、手にて足をおで、髪をいちるなと宜しからす、凡て手ハ膝の上よ置ク、(貴人の前にても、膝の両脇よ手の指先を着くべし)用おき事よ動かさぬ様にすべし、又客の顔を打おが免居るハ失禮なり、仰かぎ俯ぶかすして客の方よ心を配り居るへし

飲食程儀

○茶喫ち様　茶碗を右の手に取り、左の手を添へ、呑み終りて臺の上に置くへし

○菓子喫ち様　懐中よ紙を出し、箸(又は楊枝)よて菓子を取りて紙の上ふ載せ、箸を納め、左右の指先にて

菓子を二つゝ割て、左の方を紙の上に置き、先づ右の手に持ちたる方より食すべし

○膳受け様　膳を居へる人上輩なれば、両手を著きて禮をなし、中輩なれハ、両手を膝の上まで下げく挨拶し、常の通ひの人なれバ、挨拶に及バず

○酒受け様　酌人我前に來らバ、下坐の者へ挨拶して右の手に盃を取り、左の手を添へ、酒を受け呑み終りて、盃を吸物の傍に置くべし

○箸の取り様　右の手に箸を取て、左の手をそゝと添へて持ち直し、夫より物を食すべし

但し箸を休むる時は、箸の元の方を膳の右の縁にかけ置き、食し終りて膳を撤する時は、縁へかけずして、膳の内へ入れ置くなり

○吸物吸ひ様　右の手に箸を取り、左の手に椀を取り右の手を添へ、先づ汁を吸ひて元の處に置くべし

○飯の食ひ様　右の手に箸を持ちながら椀を押へ、左の拇指を少し椀の縁にかけ、餘の四指にていと底

の遠を持ち飯をバ初めは二箸ほど、二度めより三箸ほどつゝ食すべし

但し三の膳まで出しこき蓋の取り様も、右の手ホて蓋を取り、左の手に移し、膳の左の方に仰むけて置くべし、尤も左の方の物ハ左の手ホて取り、右の手を添へて取り直し下に置き、右のゝたの物は右の手にて取るべし（様体は前に同し）蓋を取るの順序も飯、汁、平、二の汁、坪と心得べし

○汁の吸ひ様　吸物に同し

○廻り物食ひ様　飯ホ汁、再び飯に汁を食し、次ホ平を食し、次に鱠を食ち、次に二ハ汁、次ホ壺、次に猪口、次に焼物といふ順に食すべし都く平より焼物に至り一廻り食するまでも飯に汁を食するやうホ志て後ち廻りハ物を食すべし一廻終りて後ハ心まかせ何品ありとも食すべし然れども、菜より直ホ菜へ移り食にべからず、必らず飯を食し、次に廻りの物を食べし

○凡そ物喰ふには、慎志むべきこと種々あれども今ろハ最も忌むべ物病を、左に掲ぐ、常に心掛あるべき事ぞかし

箸おまり　鱠を食はんと、汁を吸へんかと、見合せ居るあり

移り箸　焼物を食ふく直に煮物ゟ移るを云ふ
もぎぐひ　箸ゟ付たる飯粒を口にて取るを云ふ
ねぶり箸　箸を深く嘗るを云ふ
こみ箸　口中へ箸にて押し込むを云ふ
こぢ箸　煮物汁の實ゟど底にある物をおち起ス
て食ふ事なり
さぐり箸　まだ何ぞあるやと探り見ゟり
そら箸　食せんと志て箸を付ス、食はずス て箸
を引くをいふ
うけ吸　汁の再進を通ひより受けて膳ゟ置かず
直ゟ吸ふをいふ

膳おし　膳の向ひにある物を取上げもせず箸に
て直に食ふを云ふ
○楊枝遣ひ様　少ス、く脇へ向き、右の手に楊枝を持
ちて遣ひ、鼻紙を出ス て口をぬくひ、楊枝を其紙に
包み懐中か袂に入るべし、久ス、くハ遣はぬ者なり
○抹茶受け様　茶碗の底を左の掌に居へ右の手を
向ふの方にあてい受取り、夫より右の拇指を茶碗の
手前ゟ右ス、他ゟ指を向ふの方へ伸ハし、茶を呑み畢
り て下に置くべし
○人ゟ招待ゟ應じて行くときは、早きも遅きも然る
可らず、時刻到らバ縦ひ用事あるとも差置きて行く

べし、坐に著ては、亭主へ挨拶始終おち免無きやう
ふ氣を付くべし、料理鹽梅等あまりふ譽め過ぎ言葉
多きは却て惡し、又何を出しても むさ〳〵喰ふて仕
舞ふハ甚だ宜しからず、亭主の氣を付た体の物ハ客
も亦氣を付けて、夫々に挨拶肝要なり

○附録

○坐なある物を蹈越べからさる事　何によらす少
しの物にても蹈越るハ惡し、通るべき道ハ物あらハ、
跪づき、傍へ直して通るべし、草履ハ足に付る物なれ
とも人の草履を蹈付る事失禮なり

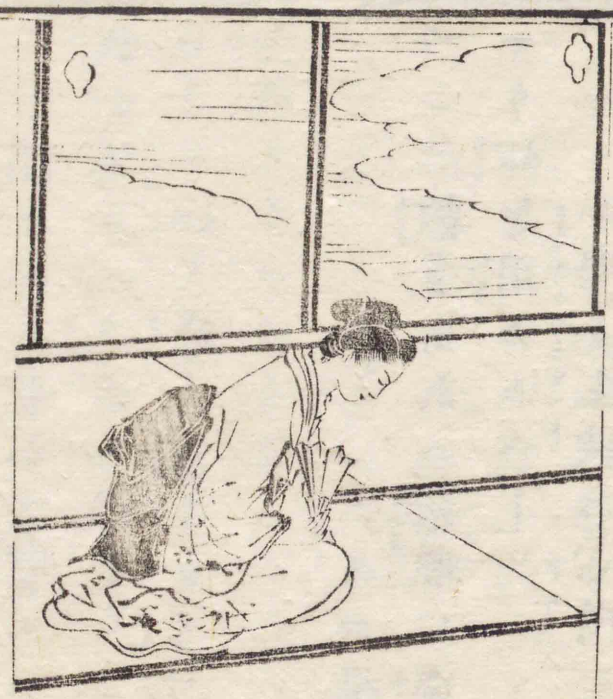
○言葉つき心得　高からず低くからず、口早にあく
口重にあく、躁かしからぬ樣に言ふべし、殊に常に氣
を付け噂あむべきこと、賤しき詞づかひ、俗の流行
言葉等言ひあらへば人前にて風ゝいふ者なり、縱ひ
人は云ふことなりとも、聞きふくき言葉ハ云むざる
やうふ心得べし、又人の咄し半ば我も咄出さと失
禮なり、いらくとも人の話しをバ、篤と末まで聞くへ
し

○途中人と連たつ時心得　目うへの人と連れた
つ時ハ、雁の行くが如く、跡ゝ付きて行くべし
○鼻をかむ心得　上輩の前にてハ、次の間へ立てか

むべし、立れさる場合なれハ下坐へ向ひ、少し低くあ
みて鼻をぬぐひ置くべし、同輩は下坐へ向ひかむべ
し都て鼻をかむハ低く短くかむべし、高鼻をうむ
失禮なり、平生ふ斯くかみ習ふべし、又あくび、のび、
ハき吐く事なと人の前ふてハ堅く慎しむべし

○圓き物くひ様の事　丸餅蒲鉾其ほか都て圓きも
のハ、小口ふ二口づゝ食ふものなり、一口に喰ひ切る
ときは、三日月の狀に、齒形の残る故に嫌ふなり

○扇子の遣ひ様　扇子は、上輩の前よくは遣はぬやう
に心得べし、然れども盛暑ゑ時分か、又ハ時宜により
遣ふときハ、四五間ほど披き、俯ふきてそよ〳〵と扇



ぐべし

○煙草吸ふ時の心得　煙草ハ上輩の前ふてハ吸ハぬ事なり、若し時宜ふ依り吸ふとあらハ、挨拶して吸ふべし、又吸ひ殼を敲くふ、上輩へも勿論同輩ゑ前ふくも、直ふ唾壺を敲くこと失禮なり、先づ手掌にて受け敲くべし、縱ひ直に敲くことあるも、高音のせぬ様に心掛くべし

○恭敬ふ程度ある事　人に對し、或は物を扱ふこの時は、恭敬の心を失はざる樣ふ、心掛くること肝要なり、然るバとく餘ほ恭敬ふ過ぎて、却て失禮になることゝ間々ある者なり譬へハ人の家ふ行きたるとき我が坐すべき處へ請せらるゝを、頻りふ辭退ふ過ぎて直らさる如き、或は菓子など出し饗應せらるゝ時、わる遠慮ふて一つも喰はざる如き等の事は、却て不敬なる而已ならず、徒らふ主人の機嫌を損すべし、其他是等のこゝ數多あれハ、恭敬に過ぎて、却て失禮に渉らぬやう心を用ゐるべし

小學女生徒の心得

○嗽くとき、嘔吐の聲など發す可らす○手又は顔を洗ふ時、手水の四邊ふ散らさる樣す可し○食事する時ハ噎ぶ勿れ、彼處此處を見廻ふ勿れ、箸に着たる飯を隻箸にて落す勿れ、沓の物にく淡茶ふ中をクルくこ搔き廻す勿れ、箸にて飯を椀の中へ押込み、固めて食ふ勿れ○鼻ハ食事に就く前にかみ置くべし○襟紋ハ常に正ふくすべし、人ふ前にて襟、袖口を繕ふハ失禮なり○歩く時ハ、小歩にて静かふ歩くべし、蹶くこと、埃たてるを等凡て大失禮なり○尊長者と物を授受する時ハ、少しく其身を屈め手を捧げて、其品を戴く樣ふすべし○硯料紙を進める時ハ、硯の海を已れ

の前に志、紙ヒ切目を我左のかたになす○扇子を進する時ハ右の手にて要ヒ處を持ち之を立てゝ出すべし　小刀を進する時ハ、其柄の端を持ち、其刃を我方へ向けて出すべし○朝起紀ことハ、父母兄姉等ヨ禮志日暮れて寐室に入る時も、亦必ずお禮すべし○學校ヨ出でたらバ、能く教師ヒ命ホ從ひ、行儀作法等に疎忽なきやう心掛べし①起居進退都て靜穩に志て、清淑なるを要す

新撰女禮式終

明治二十六年二月五日　印刷
仝　二十六年二月十九日出版

編輯兼發行及印刷者　大阪市南區安堂寺橋通四丁目二百四十番屋敷　青木恒三郎

仝　大阪市心齋橋筋博勞町　青木嵩山堂

仝　東京市日本橋區通一丁目　青木嵩山堂

仝　神戸市元町四丁目　嵩山堂支店

發賣所　勢州四日市港竪町　嵩山堂支店

版權所有